



名古屋大学 歴代総長略伝

－名大をひきいた人びと－

堀田慎一郎

名古屋大学 歴代総長略伝

―名大をひきいた人びと―

堀田 慎一郎

目次

はじめに	2
第一部 前身諸学校の校長・学長	3
後藤 新平 4 熊谷幸之輔 7 田村 春吉 10 大島 義脩 12	
渡辺 龍聖 15 水野 敏雄 18	
第二部 名古屋大学の歴代総長・学長	21
渋沢 元治 22 田村 春吉 25 勝沼 精藏 27 松坂 佐一 30	
篠原 卯吉 33 芦田 淳 35 石塚 直隆 37 飯島 宗一 40	
早川 幸男 43 加藤 延夫 45 松尾 稔 48 平野 眞一 50	
浜口 道成 53	
おわりに	55

はじめに

名古屋大学は、一九三九（昭和一四）年に名古屋帝国大学として創立され、今年で七〇周年をむかえました。

その間、初代の渋沢元治総長から二〇〇九年三月に任期満了で退任する平野眞一総長まで、一二代の総長および学長が大学の運営にあたりました。本書は、こうした歴代の総長・学長について、その略歴や在任時代の主な事績などを分かりやすくまとめたものです。

また名古屋大学は、医学部の前身をたどっていくと、一八七一（明治四）年の名古屋県仮病院・仮医学校にまで歴史をさかのぼることができ、ここから数えると今年で創基一三八周年となります。本書では、医学部の前身学校のほか、第八高等学校・名古屋高等商業学校・岡崎高等師範学校を含めた前身諸学校の校長や学長についても紹介します。

名古屋大学およびその前身諸学校では、どのような人物が総長や校長になったのでしょうか。また、その在任中はどのような大学運営がなされ、どのようなことが起こったのでしょうか。本書では、その概略を紹介できればと思います。

尚、本書では、敬称を省略させていただくことをあらかじめおことわりしておきます。

第一部

前身諸学校の校長・学長

愛知医学校校長

後藤 新平（ごとう しんぺい、任一八八一〜一八三〇）

名古屋大学医学部の前身である愛知医学校の校長を、一八八一年から八三年にかけて務めた後藤新平（一八五七―一九二九）は、安政四（一八五七）年、水沢藩士の子として陸中国胆沢郡塩釜村（現在の岩手県奥州市）に生まれました。水沢藩が戊辰戦争で明治新政府に敵対したため、貧しいうえに出身者への世間の風当たりもきつく、苦学を強いられましたが、福島県の須賀川医学校で勉学に励みました。



そして一八七六（明治九）年、医師として初めて就職したのが愛知県公立病院（八一年に愛知病院と改称）でした。安月給の三等医ですから、経済的には恵まれないポストでしたが、当時は病院内にあった医学校には、お雇い外国人ローレルと司馬凌海という、ドイツの医学や衛生学を学ぶには当代最高の人物がおり、後藤が経験を積むには最適であったといえます。七七

年に西南戦争が勃発すると、大阪に設けられた臨時病院で外科医として勤務しました。これにより医師として自信を深めると、翌七八年には公立病院に復帰し、それからめざましい出世を上げました。正式に医学校長兼病院長になったのは八一年、二四歳の時ですが、すでに七九年から代理や心得として学校と病院の経営にあたっていたのです。

当時の愛知病院は、まだ内科と外科の区別もないような状態で、あらゆる面において早急に基礎を確立する必要に迫られていました。後藤校長は、思い切った人事を断行し、ローレツの後任には超高給取りの外国人ではなく、当時きわめて貴重だった日本人医学士を四名も採用しました。奈良坂源一郎や次項で紹介する熊谷幸之輔といった、後藤校長が去ったのちの愛知医学校を担った人材もこの時に着任しています。そして彼らを中心にして、組織の大幅な改編をおこないました。その結果、愛知医学校は全国的にも有名になり、八三年には全国でも数少ない甲種医学校に選定されました。もしこの時、位置づけとしては一段下の乙種にあまんどいていたら、愛知医学校ひいては名古屋大学の歴史も少なからず変わっていたかもしれません。

後藤校長の活動は、地域の衛生行政の確立にもおよびました。後藤新平といえは、とにかく計画立案が好きで、大きな構想を打ち上げる人物として知られています（「大風呂敷」との異名もあります）。この性質は、すでに愛知医学校時代から発揮され、いくつもの建白書を愛知県や明治政府に提出しています。さらに自ら県内の有志にはたらきかけ、一八八〇年には衛生

活動の自治団体である愛衆社を設立しました。これは、その三年後に創立される大日本私立衛生会の先駆けともいえるものであり、後藤校長の先見性を見ることが出来ます。その活動は県の枠をこえ、実現はしませんでした。愛知・岐阜・三重三県の医学校を統合する構想も提唱しています。また、この時代のエピソードとして、「板垣死すとも自由は死せず」で有名な、八二年の岐阜における板垣退助遭難事件があります。自由党と関わって政府にいらまれることを恐れて誰もが尻ごみするなか、後藤病院長が板垣の診察にかけつけた話です。

そして一八八三年、後藤は内務省衛生局に入り、官僚としての道を歩むことになります。日本にドイツを範とする衛生行政を確立したのち、日清戦争で日本が獲得した台湾において、九年から一九〇六年まで八年余りにもわたって、台湾総督府民政局長および民政長官という総督に次ぐポストにあり、植民地行政を軌道にのせるといふ大きな業績を残しました。

その後、日露戦争（一九〇四〜〇五年）で日本が得た満蒙（中国東北部）権益の核ともいえる満鉄の初代総裁に就任、さらに桂太郎の信頼を得て、桂内閣期における逓信大臣（鉄道院総裁や拓殖局総裁なども兼任）、さらに寺内正毅内閣（一九一六〜一八年）では、内務大臣、外務大臣を歴任しました。その後、東京市長となり、さらに一九二三（大正一二）年に関東大震災で東京が壊滅すると、内務大臣兼帝都復興院総裁となつて東京の復興計画を立案するなど、近代日本を代表する官僚・政治家として幅広く活躍したことは、ご存じの方も多いかと思えます。

愛知医学校 愛知県立医学校 愛知県立医学専門学校校長

熊谷幸之輔（くまがい こうのすけ、任一八八三〜一九一六）

医学部の前身にあたる愛知医学校・愛知県立医学校・愛知県立医学専門学校の校長を三〇年以上にわたって務めた熊谷幸之輔（一八五七―一九二三）は、安政四（一八五七）年、現在の秋田県仙北郡美郷町六郷に生まれました。生家の熊谷家は、地元の熊野神社の社家で、本来なら長男である幸之輔が後を継ぐはずでしたが、志を立てて一六歳で上京、一八七三（明治六）年に第一大学区医学校へ入学し、同校などを再編した東京大学医学部を八一年に卒業しました。

医学部の同期生には、のちに陸軍軍医総監となり、そして小説家としてつとに有名な森鷗外や、熊谷とともに愛知医学校や愛知医専を支えて「熊谷あつての奈良坂、奈良坂あつての熊谷」とも言われ、著名な解剖学者となつた奈良坂源一郎などがいました。

そして一八八一年、後藤新平校長の招きをうけた熊谷は、奈良坂らとともに愛知医学校の一等教諭として



赴任しました。当時の医学士はきわめて希少な存在であり、熊谷の月給は一二〇円と、後藤校長の月給九〇円を大きく上まわっていました。熊谷は、後藤校長の改革を担う人材として期待され、着任した年に愛知病院の外科医長に就任しました。そして早くも、八三年には愛知病院長、同年まもなく愛知医学校長に任じられたのです。

さて、一八八三年に甲種医学校として認定された愛知医学校ですが、熊谷の校長時代の前期は、存続にかかわる大きな危機が二度もあるなど、苦しい時期でした。

まず、一八八六年の中学校令をうけて、全国五つの学区に一つずつ設置された高等中学校の医学部になれなかつた府県立医学校は、地方税による経営を禁じられたのです。これは、愛知医学校にとつて廃止宣告とすらいえるものであり、熊谷校長にも、高等中学校医学部長就任の内示があつたといえます。しかし熊谷校長は、県立ながら独立採算制となつた愛知医学校に残ることを決意し、教職員一丸となつた諸改革に取り組み、財政難に悩みながらも何とか経営を続けました。この時に生き残つた府県立医学校は、愛知以外には京都と大阪しかありません。

さらに一八九一年、浄土真宗三派（本願寺派・大谷派・高田派）が愛知県に対し、愛知医学校・愛知病院の払い下げを請願するという騒動が起きました。浄土真宗三派は、七三年に愛知県公立病院（愛知病院の前身）が再興される際、その設立資金として巨額の寄付をした経緯をもっていました。ただ浄土真宗側も熊谷校長を高く評価し、その留任を前提としての払い下

げを求めていたのです。これに対し、医学校と病院の経営難に悩む熊谷校長は、宗教的な干渉が学問の領域に及ぶことがないのであれば、との条件付きでこれに賛成の立場をとりました。しかしこの時、県会議員や名古屋の開業医、そして医学校生たちなどによる、激しい反対運動が起こりました。地方新聞各紙も、浄土真宗や熊谷校長を激しく攻撃しました。このいわゆる院校払い下げ事件は、まもなく県知事が請願を却下したことで落着きますが、熊谷校長は辞意を表明しました。しかし県は慰留し、学生も責任を追求することはずせ、留任することになったのです。払い下げに賛成したことはともかく、熊谷校長の手腕は広く認められていました。

在任前期とは対照的に、中期から後期においては、比較的順調な学校経営ができたといえるでしょう。一八九〇年代半ばあたりから経営が安定し、教職員の数も増え、設備の充実も進みました。一九〇一年に愛知医学校は愛知県立医学校と改称、さらに〇三（明治三六）年に愛知県立医学専門学校となります。そして一九一四（大正一三）年、天王崎（現在の名古屋市中区栄一丁目）から、現在も名古屋大学医学部と附属病院がある鶴舞への移転を実現させ、施設の老朽化・狭隘化という年来の大問題を解決したのです。

鶴舞移転を見とどけた熊谷校長は、一九一六年、老齢と病気を理由に辞任しました。一八年に愛知医専の玄関前に建てられた熊谷の銅像は、のち戦争のため供出されてしまいましたが、戦後になって再建され、現在も鶴舞キャンパスに置かれています。

名古屋医科大学学長

田村 春吉（たむら はるきち、任一九三二〜三九）

名古屋大学医学部の前身である名古屋医科大学の学長を、一九三二（昭和七）年から七年余りにわたって務めた田村春吉（一八八三―一九四九）は、一八八三（明治一六）年、東京府京橋区桶町（現在の東京都中央区）に生まれました。東京府立第一中学校から第一高等学校に進学し、一九〇五年に卒業、東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に入学します。卒業後も皮膚科教室に残って研究を続け、一六（大正五）年、愛知県立医学専門学校教諭（のち教授）として名古屋に赴任しました。鶴舞キャンパスに移転して間もない頃です。

その後、ヨーロッパへ三年近く自費で留学して研さんを積み、二三年に愛知医科大学教授（皮膚病花柳病学担当）となりました。二六（大正一五）年には附属医院長に任じられています。そして三一（昭和六）年、愛知医科大学が官立移管され、名古屋医科大学教授に就任しま



した。この時、愛知医学校出身で愛知医専以来の教員であった教授らが、移管後の教授に任命されなかつたことに、学生や助手、学友会などが反発し、文部省も巻き込む人事紛争が起こりました。まもなく解決はしたものの、藤井静英学長は辞任し、後任に田村が就いたのです。

田村は、学長就任を承諾する時、文部省に対して予算の増額を主張して譲らず、加藤鏢五郎りょうごろう衆議院議員（愛知医専卒業生）の尽力もあつて、それを認めさせました。これは官立移管に際し、以後一〇年間、政府支出金は出さないと条件が付けられていたことが背景にあります。その後も田村学長は、時にワンマンとも言われるような采配ぶりです。政府支出金の獲得、予算の特定分野への重点配分の断行などによって、着実に施設を充実させていきました。

そして何と言つても、田村学長が名古屋帝国大学創立の大きな立役者であつたことを忘れてはならないでしょう。田村学長は、就任当初より名医大を基礎として総合大学を創設することに情熱をかたむけました。持ち前の行動力と政治力で、地元、とくにこの頃人口が一〇〇万人に達し、工業の発展も著しかった名古屋市の政財界やジャーナリズムにその必要性をうったえました。加藤鏢五郎衆議院議員がその熱心さにあきれるほどで、当時「総合大学君」とあだ名を付けていたと回想しています。また、政財界人が集まつた席において愛知県知事が博物館を建設する計画を発表すると、田村学長は同じ席においてこれに堂々と反対し、総合大学を創設すべきことを主張して、知事を翻意させたというエピソードも残っています。

第八高等学校校長

大島 義脩（おおしま よしなが、任一九〇八〜一八）

名古屋大学旧教養部（一九九三年廃止）の前身にあたる第八高等学校（一九〇八〜一九五〇）の初代校長、大島義脩（一八七一〜一九三五）は、一八七一（明治四）年、丹波国氷上郡佐治村（現在の兵庫県丹波市）に生まれました。生家の蘆田家は、佐治村の大庄屋を世襲する豪農でしたが、義脩は四男で、幕末期から家政が苦しくなっていたこともあって、八歳の時に母の実家である大島家へ養子に入りました。大島家は、江戸時代は旗本小出家の家臣で、当主

貞敏は義脩の叔父でした。

大島は、判事であった養父貞敏の下、当時にあつては最高の教育を受けました。長崎県中学校では首席を占め、一八八六（明治一九）年には貞敏の大阪転任にもなつて、当時は大阪にあつた第三高等中学校予科に移りました。同校本科をきわめて優秀な成績で卒業し、九一年に帝国大学（現在の東京大学）に進学しま



す。高等中学校では数学の成績が抜群だったとありますが、文科大学（文学部）哲学科を選びました。ここで大島は、カントやショーペンハウエルなどのドイツ哲学を学びました。哲学科の同級生には、のちに日本を代表する哲学者となる西田幾多郎などがいましたが、大島は常に首席の座にあり、卒業もトップでした。九四年の卒業式には、全卒業生代表として答辞を述べています。とくに優秀さを認められて大学院に進学し、倫理学を研究しました。

そして一八九七年、大島はいきなり第四高等学校（金沢）教授に任ぜられました。二七歳の時です。そして九九年には文部省専門学務局の視学官となり、約九年間その任にありました。その間、東京音楽学校（現在の東京芸術大学の前身）教授、さらに校長を兼務し（次項で紹介する渡辺龍聖の後任）、一年半ほどの短い期間でしたが、学校経営の経験を積みました。校内規則を改正し、学校の肅正を進めたとされています。そして一九〇八年、愛知県愛知郡呼続町（現在の名古屋市瑞穂区）に創立された第八高等学校の初代校長として赴任することになりました。

三八歳で就任したこの若き校長は、それまで高等学校ではおこなわれてこなかった新しい方策を次々に実行に移しました。学生指導における指導教官制度、事務組織における課長制度、創立一〇周年の記念祝賀式の挙行、公認下宿制度、各種運動の奨励と選手制度の否定、などがそれです。また施設面では、宏壮な講堂、娯楽施設としての茶寮、奉安殿（天皇・皇后の肖像

写真を安置する施設)の建設などがあります。多くは大島校長が考案、あるいは新工夫を加えたものでした。これらの方策・施設は、全国的にも注目され、多くの学校で取り入れられてきました。

その中でも、八高の異名ともなった有名なものとして、軍事教練と現役将校などによるその検閲講評があります。これは、八高創立当初から実施された、高等学校では初めての試みで、学校を国民的修養の道場と見なし、厳格な心身の鍛錬を重視する、大島校長の創意によるものとされます。その背景には、大島校長が大学卒業直後の日清戦争期に一年志願兵となり、その後も勤務演習や日露戦争で召集されて、陸軍歩兵中尉の階級を持っていたことがあるようです。教練の検閲には、大島校長自らが熱心にあたったといえます。こうして「教練八高」の呼び名が確立しました。

このように大島校長は、次の校長の言葉を借りれば、「規律厳正の中に自己啓発の自由を残し、伝統を尚たつとばしめつつ新機軸を重んぜしめる」学校運営をおこなって基礎を固め、一九一八(大正七)年に八高を去りました。その後、女子学習院(官立、現在の学習院女子大学)の初代院長、帝室博物館総長などを歴任しています。

名古屋高等商業学校校長

渡辺 龍聖（わたなべ りゅうせい、任一九二二〜三五）

名古屋大学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校（名高商、一九二〇〜一九五二）の初代校長である渡辺龍聖（一八六二？―一九四五）は、文久二（一八六二）年（一説には一八六五年）、越後国古志郡吉水村（現在の新潟県長岡市）で加藤周淨の長男として生まれ、のちに渡辺伝蔵の養子になったとされますが、あまり詳しいことは分かっていません。



渡辺は、一八八七（明治二〇）年に東京専門学校（現在の早稲田大学）を卒業し、帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）哲学科に入学、八九年からアメリカに留学し、ニューヨーク州のコネル大学大学院で哲学博士号を取得しました。日清戦争中の九四年に帰国し、九五年に高等師範学校（現在の筑波大学）の教授となり、一九〇一年には東京音楽学校の校長となりました。この当時の学生に滝廉太郎がいます。その後、清国（当時の中国）の袁世凱（のち

の中華民国大總統)の学務顧問、文部省の清国視察団長などを歴任、ドイツへも留学したのち、一九一一年、新設された小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)の初代校長に就任しました。この小樽高商での経験が、のち名高商で存分に生かされることとなります。

やがて渡辺は、名古屋に高等商業学校を設置すべきことを文部大臣に進言したり、創立委員長を務めるなど、その設置前から名高商に深く関わりました。そして一九二〇(大正九)年、愛知県と名古屋市からの多額の寄付によって官立名古屋高等商業学校が設置されると、翌年には初代校長に就任しました。以後、約一四年間にわたって、名高商の経営の任にあたります。

渡辺校長は、小樽高商で実践した教育を、名高商でさらに発展させていこうとしました。その特徴の一つは、第一学年において、基礎的な商業科目以外の教養科目にもかなりの時間を割いたことです。これは、経済人の卵である学生たちに、教養豊かな紳士としての風格を求め、渡辺校長の教育方針によるものです。また、第二・第三学年の専門科目においても、商業実践、商品実験、商工心理、能率研究など、それまであまり重視されてこなかった、実践的な科目を積極的に取り入れるとともに、その近年にアメリカで生まれたケースメソッド教授法を日本の高等商業学校で初めて試みました。また企業実践の実習のため、校内に印刷工場を建設しました。また、これらの教育を担う気鋭の教員を全国から集めました。

また、名高商が廃止されるまで続いた校風を確立したのも渡辺校長です。それは、「学生は

学生らしくあること」、「学生は学生の本分を忘るるな」という「二大信条」に集約されるものですが、これを規則や命令ではなく、個性の違いを尊重しつつ、学生の自発性を喚起して実現したところにその真価がありました。こうした名高商の校風は、全国でも有名になったといえます。さらに、教養科目を重視したこととも関係しますが、高い人格を持つ経済人たることを求める人格主義教育を唱えました。第一次世界大戦が終わり、これからは国際経済競争の時代になると予測する渡辺校長にとって、高等商業教育とは国の代表として外国と対峙する人材を育てることだったのです。またその背景には、留学時代に学んだアメリカの功利主義・実用主義的な哲学がありました。欲望を否定せず、これをいかにコントロールするかを追求した渡辺の倫理学は、この時代の高等商業教育に適合的であつたともいえます。

このように、教育方針や校風を確立し、名高商の名高商たるゆえんをきざぎざ上げたのが渡辺龍聖初代校長でした。渡辺は、一九三五（昭和一〇）年に校長を退き、小樽高商時代からの片腕であつた国松豊に後事を託しました。その後、渡辺は名古屋市内に居をかまえました。敗戦の直前に亡くなりました。その墓所は、現在の名古屋大学東山キャンパスにほど近い、八事の興正寺にあります。また、経済学部の中庭（キタン庭園）には、キタン会（経済学部同窓会）によつて建立された渡辺龍聖像が後輩たちを見守っています。

岡崎高等師範学校校長

水野 敏雄（みずの としお、任一九四五〜四六）



名古屋大学教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校（一九四五〜一九五二）の初代校長、水野敏雄（一八九三―一九八二）は、一八九三（明治二六）年、中学校の教員であった水野喜太郎の長男として東京市に生まれました。のち父の赴任先である福島県に移り、県立会津中学校を卒業後、一九二一年に第一高等学校に入学、一四（大正三）年には東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）の哲学科に入学、教育学を専攻しました。卒業後、文部省に入りますが、二〇年には山口高等学校教授（哲学・ドイツ語）となり、二七年には東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）教授（倫理学）となりました。三七年に文部省へもどり、教学局指導部指導課長などを歴任し、一九四五年（昭和二〇）四月、新設の官立岡崎高等師範学校（岡崎高師）の校長に就任しました。高等師範学校は、主に中等学校の教員を養成する学校

です。

岡崎市の二〇年にわたる誘致運動が実り、さらに同市による土地や建物の寄付によって設置された岡崎高師でしたが、時代は戦時期しかも敗戦の四カ月前という、まさに最悪とすらいえました。したがって、水野校長の苦心も並大抵のものではありませんでした。

学科を見ても、戦争の国策に合致する理科のみしか認められませんでした。正規の付属学校も設置が認められず、当分の間は代用付属学校を置くこととされました。また、校地や校舎も、岡崎市立工業学校のを転用することになり、教授用の設備については、四年かけて徐々に整備するとされていたのです。教員も、定員一八名のところ、設置と同時に着任した教官は水野校長ほか三教授のみ、以後しだいに充実していったものの、定員を満たすことができませんでした。物不足のため、入試要項の印刷すら満足におこなえなかつたといえます。ただ全く希望がなかつたわけではなく、第一回入試には、定員の約二三倍もの入学志願者が殺到し、優秀な学生を迎えることができました。しかし、合格発表の一週間後には戦時教育令によって学業が事実上停止され、そして七月二〇日の岡崎空襲により、校舎のほとんどが焼失してしまったのです。

したがって敗戦後の復興は、水野校長自身の言葉を借りれば、まさに「ゼロから再出発する」ことになりました。水野校長は当時の状況を、「…わが校は孤立無援、微力ながらお互い

の力の限りを出しあって、開校^{そうごう}匆々の難局を乗り越えようとする悲壮な気魄^{きぱく}に溢^{あふ}れていた。」と回想しています。仮校舎での学校運営のかたわら、水野校長にとって焦眉の急は、本格的な移転先の確保でした。しかし、岡崎市内には適当な校地や校舎が見つからず、水野校長は岡崎市を離れて豊川市の旧豊川海軍工廠施設へ移転するという、苦渋の決断をすることになりました。

それでも水野校長は、イギリスの詩人ワーズワースの詩の一節、「High thinking and Low living（想いは高く、生活は低く）」を口ずさみつつ、模倣ではなく新しいものを創始することをめざす清新な学風を興すべく、新天地での本格的な学校経営に乗り出しました。水野校長が回想するように、それは多分にやせ我慢が含まれていたかもしれませんが、全てはこれからでした。しかし、一九四六年五月、GHQ（連合軍最高司令官総司令部）の指示による、いわゆる公職追放令によって、水野校長は職を退かなければならなかったのです。その一年余りの任期は、まさに苦難に暮れたともいえました。

一九五〇年に公職追放を解除されてからの水野は、日本育英会理事、のち理事長として活躍したのち、六二年から六八年まで島根大学の学長を務めました。

第二部

名古屋大学の歴代総長・学長

初代総長（名古屋帝国大学）

渋沢 元治（しづさわ もとじ、任一九三九〜四六）

名古屋（帝国）大学初代総長の渋沢元治（一八七六一一九七五）は、一八七六（明治九）年、埼玉県榛沢郡血洗島村（現在の深谷市）に、郡でも指折りの豪農、渋沢家の長男として生まれました。近代日本を代表する企業家である渋沢栄一は、その伯父にあたります。

渋沢は、東京府立尋常中学校を卒業後、一八九四年に第一高等学校に入学しました。そして九七年には、東京帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）に進みます。当時は新しい分野であった電気工学を学びますが、在学中から独自の理論が学会に注目されました。卒業後、伯父栄一のすすめで四年近く欧米へ留学し、一九〇六年に通信省へ入りました。以後、技術官僚として活躍し、日本の電気行政の確立に大きな足跡を残しました。

その一方で渋沢は、日本を代表する電気工学者でもありました。当時きわめて希少であった工学博士号を



持ち、東京帝国大学教授も兼務、一九二三（大正一二）年には日本電気学会会長となります。そして二四年には逋信省の技術課長を辞し、東京帝国大学の専任教授に就任しました。二九（昭和四）年には工学部長となり、さらに同年、世界の電気工学者にとって最高の榮譽であった、アメリカ電気学会名誉会員に選ばれました。三七年に定年退官したのち、三九年、新設された名古屋帝国大学総長に任命されたわけです。

しかし、創立当時の名古屋帝国大学（名帝大）は、鶴舞の名古屋医科大学があつた医学部はよいとしても、理工学部についてはまだ名前だけで、地元から寄付された東山キャンパスには何もなく、これから施設を整備し、教官を集めるといのが実状でした。渋沢総長は、これまでのキャリアによつて培つた声望や人脈などを駆使し、苦勞のすえ創立後一年で何とか理工学部の発足にこぎつけたのです。

とはいえ、戦争はますます激しくなり、大学をとりまく環境は悪くなる一方でした。渋沢総長は、聖徳太子の一七条憲法の一節「以和為貴（和をもつて貴しとなす）」の書を総長室の額として掲げ、これを大学全体の座右の銘として困難に立ち向かいました。総長と学生が鍋や弁当を食べながら懇親をはかる「総長懇談会」も、その一環といえるでしょう。そして一九四二年に理学部の分離独立が実現させ、さらに名古屋市おける航空機産業の隆盛を背景に、医学部の講座から実績を積み上げ、四三年に航空医学研究所を附置しました（渋沢総長が所長を兼任）。研究

資金の不足も深刻でしたが、愛知県科学技術振興会の資金など、地域からの援助によって何とか補いました。こうして、総合大学としての体裁がまがりなりも整い、工学部の第一回卒業生を出した直後の四三年五月一日、医学部学友会の寄付を得て開学式が挙行されたのです。もつとも、資金と物資の不足で東山の施設はまだ貧弱であり、農学部や文系学部の設置も大きな課題として残されていました。しかし戦局が悪化するなか、それらの解決は困難でした。

敗戦後も、渋沢総長の苦闘は続きました。空襲で焼失した校舎の復興予算を獲得することに奔走するとともに、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の指示で航空に関する教育研究が禁止されたことをうけ、航空医学研究所を環境医学研究所に改組する案で政府と交渉し、これを存続させることに成功しました。しかし、そうしたなかで体調をくずし、老齢もあつて、一九四六年一月に退任せざるをえませんでした。

退任後の渋沢は、故郷の埼玉県にもどりました。健康を回復したのち、学会などさまざまな活動に復帰しました。とりわけ精力的な文筆活動が目につきます。そして一九五五年、電気関係者として初めての文化功労者に選ばれました。これを記念して、日本電気協会による「澁澤賞」がもうけられ、現在でも電気保安事業に功績のあつた人々を表彰し続けています。

名古屋大学大学文書資料室では、こうした渋沢初代総長の生涯を物語る個人資料約一千点を所蔵し、一般に公開しています。

第二代総長（名古屋帝国大学 旧制名古屋大学）

田村 春吉（たむら はるきち、任一九四六〜四九）

名古屋帝国大学（四七年一〇月から名古屋大学（旧制）に改称）第二代総長田村春吉の経歴などについては、第一部をご覧ください。

さて、一九三九（昭和一四）年、愛知県からの莫大な寄付金によって名帝大が創立されると、功労者の田村を総長にとの声もあつたようですが、医学部長として渋沢総長を支えることになりました。田村医学部長は、農学部や文系学部の設置とともに、東山のキャンパス計画にも熱心に取り組みました。自ら自動車に乗って敷地を踏査するとともに、東山一帯の千分の一スケールの大きな模型を作らせ、これを見ながら計画を練りました。このいわゆる「田村模型」は、戦後しばらく行方不明になつていたものが、最近になって豊田講堂の倉庫から発見され、大学文書資料室が保存措置を施したうえ、名古屋大学博物館に展示されています。



そして敗戦後の一九四六年一月、田村は総長に就任しますが、当時の名帝大はまさに前途多難でした。まず、空襲によって焼失した鶴舞キャンパス（医学部）や西二葉キャンパス（工学部）の復興や代替施設の確保を早急におこなう必要がありました。また、戦災にあわなかった校舎も、戦時中に建設された粗末なものだったため、これも建て替えていかなければなりません。さらに、名実ともに総合大学となるためには、文学部、教育学部、法学部、経済学部、農学部の新設が不可欠でした。そして、新制大学に移行するための準備があります。そのためには、第八高等学校や名古屋高等商業学校、岡崎高等師範学校などを包括する必要もありました。一つ一つですら大きな仕事を、ほとんど同時に進行させなければならなかったのです。

もちろん、こうした復興と総合大学の実現に必要な資金や施設については、地元の政財界が田村総長の呼びかけに応じて「名古屋帝国大学復興後援会」を結成し、支援を惜しまなかったことを忘れてはなりません。ただ、難事の多くをなすとげ、あるいは進展させた田村総長の手腕も高く評価されるべきだと思います。とくに名古屋大学が総合大学としての内実を整えたことは、田村総長が長年の本懐をとげたものといえるでしょう。

しかし田村総長は、新制名古屋大学の出発を見ることができませんでした。新制施行まで一カ月を切った一九四九年五月、急な病に倒れ、まもなく亡くなったのです。逝去に先立って、勲一等瑞宝章が贈られました。

第三代学長（新制名古屋大学）

勝沼 精蔵（かつぬま せいぞう、任一九四九〜五九）



第三代学長の勝沼精蔵（一八八六―一九六三）は、一八八六（明治一九）年、兵庫県神戸区（現在の神戸市）に生まれました。日本郵船会社の船長だった父が海難事故で若くして亡くなる
と、母の郷里で苦学して県立静岡中学校を卒業、一九〇四年に第一高等学校に入學しました。
東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に進學し、一一年に卒業、大学に残って内科
学や病理学の研究を続けました。また、一九（大正八）年におこなわれた、第一次世界大戦の
パ
リ講和会議には、首席全権の西園寺公望（元首相、元
老）付きの医師として随伴した三浦謹之助の助手として
同行しました。三浦は、勝沼の大学時代の指導教官です。
これをきっかけに、勝沼は西園寺の担当医となり、それは
四〇年に西園寺が死去するまで続きました。

そして、一九一九年にパリから帰国した直後、愛知
県立医学専門学校教授として名古屋市に赴任しました。

二三年には愛知医科大学教授（内科学）に就任します。勝沼といえば、一般に血液学の泰斗として知られていますが、ドイツ留学から帰国後の二六年、「オキシダーゼの組織学的研究」で帝国学士院賞（現在の日本学士院賞）を受賞しました。オキシダーゼとは、生体内の酸化酵素のことです。名大創基一三八年の歴史において、日本（帝国）学士院賞の受賞者は二九名を数えますが、勝沼がその最初の受賞者となりました。戦後の一九五四（昭和二九）年には、これも名大史上初の文化功労者に選ばれ、文化勲章も授章しています。

一九三一（昭和六）年、官立移管の名古屋医科大学でも教授となり、三九年創立の名古屋帝国大学でも、附属病院長として田村春吉医学部長を支えました。そして四七年七月、新制名古屋大学において、田村総長の急逝後の業務を代行していた生源寺順学長事務取扱の後をうけ、第三代学長に就任しました。以下、一〇年と大変長い勝沼学長時代（次の松坂学長以降は、六年が任期の上限とされました）の事績を、かいつまんで紹介していきます。

勝沼学長の最も大きな課題は、田村総長の事業を引き継ぎ、名古屋大学を新制の総合大学として完成させることであつたといえます。学部整備としては、一九五〇年に法経学部を分離して法学部と経済学部を独立させ、五一年には農学部を発足させました。とくに、田村総長が果たせなかつた農学部の新設は、勝沼学長のはたらきかけもあり、かねてより設置に意欲を見せていた地元の政財界が「名古屋大学農学部創設後援会」を結成し、巨額の寄付金と安城町

（現在の安城市）による施設の提供によって実現しました。これで一通りの学部がそろったこととなります。また五三年および五五年には、新制大学院が設置されています。

ただ学部はそろったものの、各地に分散する「たこ足大学」の状態でした。通信手段が発達していなかった当時、各学部が同じキャンパスに集まることは、総合大学にとつて現在よりも重要だったものと思われれます。これが比較的早く実現していった背景には、名大が全国でも初めての「建築交換方式」（大学の施設や敷地の取得を希望する企業や自治体に、その代価として東山キャンパスに校舎を建設してもらう方式）をとったことがあります。この方式は、勝沼学長の指揮の下、事務局の大変な尽力によって実現したものです。五五年に工学部（民間企業との交換）が、五九年に経済学部と法学部（名古屋市との交換）が東山に集結し、その後、文学部、教育学部、大学本部、教養部も集まりますが、いずれも名古屋市との建築交換です。

そして、現在も名大のシンボルであり続けている豊田講堂の建設も、勝沼学長時代の大きな事績として挙げるべきでしょう。すでに名帝大時代から、東山への講堂の建設は大きな課題とされ、多額の寄付金が集められていましたが、戦後のインフレや学部の設置などによって使い果たされていきました。勝沼学長がトヨタ自動車工業株式会社（現在のトヨタ自動車株式会社）に重ねて足を運んで依頼した結果、依頼した倍の金額の寄付の申し出があり、念願の講堂が建設されることになりました。現在、豊田講堂のロビーには、勝沼学長の胸像が置かれています。

第四代学長

松坂 佐一（まつさか さいち、任一九五九〜六三）

第四代学長の松坂佐一（一八九八―二〇〇〇）は、一八九八（明治三一）年、岡山県都窪郡茶屋町（現在の倉敷市）に生まれました。愛知県豊橋市の八町尋常小学校を卒業後上京し、東京府立第一中学校から第一高等学校へ進みました。一九二三（大正一二）年に東京帝国大学法学部独逸法律学科を卒業し、株式会社第一銀行（第一国立銀行の後身）に就職しますが、二七（昭和二）年に京城帝国大学法文学部助教授に転じました。三〇年には教授となります。京城

とは現在の韓国ソウルですが、当時の朝鮮半島は日本の朝鮮総督府による統治下にありました。

敗戦により本土に引き揚げたのちの一九四六年、敗戦前は中国上海にあった東亜同文書院大学を引き継いで設立されたばかりの愛知大学から、教授として迎えられました。そして、四八年に設置された名古屋大学新学部創設委員会の外部委員として、同年の法経学部（のち五〇



年に法学部、経済学部に分離）の創設に深く関わり、その最初の教官（非常勤）となりました。

そして翌年、正式に名古屋大学法経学部教授に就任します。当時の法学部は、名城キャンパス（名古屋城二の丸内）にありました。松坂の専門は民法で、ローマ法やドイツ・フランス法の条文・学説・判例の緻密な分析による研究に定評がありました。その後、附属図書館長、法学部長、教養部長などを歴任し、五九年に学長となりました。名古屋大学創立七〇年のなかで、唯一の文系学部出身の学長です。弁護士資格を持ち、民間企業での勤務経験がある経歴にも特徴があります。

在任の四年間における実績は、プラズマ研究所の附置（六一年）、医学部附属病院分院の第一次移転（六一年）、東山への学生会館の開設（六二年）、文学部の名城キャンパスから東山への移転（六三年）など多くありますが、ここでは就任当初の約一年間に注目してみましよう。

松坂学長が一九五九年七月に就任した時、日米安全保障条約の改定に反対する運動、いわゆる安保闘争が学内でもはじまっています。そうしたなか、八月に伊勢湾台風が襲来し、教職員・学生の多くが被災するとともに、名大の施設も甚大な被害をこうむり、学部ごとに講義の休講や試験の延期などの措置もとられました。多くの名大生が、被災した学生や住民の救援活動に積極的に参加しましたが、その過程で政治や社会の問題に自覚的に目を向けるようになってとされます。そして六〇年一月に新安保条約が調印され、さらに同年五月にその批准案などが国会で強行採決されると、闘争はいよいよ激化し、名大でも多くの学生や職員が安保反対や

民主主義擁護の運動に関わりました。

このような状況を背景として、六〇年の初夏に、名大にとって二つの大きな出来事がありました。一つは、五月に式典が挙行された豊田講堂の竣工です。この豊田講堂の建設も、伊勢湾台風によって工事が遅れ、建築費も予定より高くなるという影響をうけました。二〇〇八（平成二〇）年に改修竣工が成った豊田講堂は、現在でも重要な行事や式典がおこなわれると同時に、名大のシンボルであり続けています。

もう一つは、六月に第一回名大祭がおこなわれたことです。これは、東山への学部の集結が進みつつあった地理的条件の下、安保闘争や伊勢湾台風被災者の救援活動などによって高揚した、学生運動のエネルギーが結集されたものといえるでしょう。名大祭は、二〇〇九年で五〇回を迎えようとしています。当時とは、担い手である学生の性格に相当な違いはありますが、学部を超えた学生の統一と、学生のエネルギーの発露を象徴する行事であることは変わっていません。このように、松坂学長の就任後一年間は、日本だけでなく名大史にとっても大きな画期の一つといえるでしょう。

退任後の松坂学長ですが、弁護士を開業するとともに、NHK経営委員（六七年に経営委員長）、名古屋証券取引所公益理事などとしても活躍し、二〇〇〇年に一〇一歳で亡くなりました。名大の総長・学長としては、渋沢初代総長の満九八歳をしのぐ長寿でした。

第五代学長

篠原 卯吉（しのはら うきち、任一九六三〜六九）



第五代学長の篠原卯吉（一九〇三—一九九三）は、一九〇三（明治三六）年、現在の愛知県名古屋市中で生まれました。愛知県立第一中学校（現在の県立旭丘高等学校）を卒業して第八高等学校に進学、一九二三（大正一二）年に卒業し、九州帝国大学工学部に入學しました。二六年、電気工学科を卒業すると同時に講師に任じられ、まもなく北海道帝国大学へ転任、助教授となりました。そして一九四〇（昭和二五）年、その創設と同時に名古屋帝国大学理工学部教授（四二年の理・工分離以後は工学部教授）に就任したのです。同じ電気工学者である渋沢元治総長に見込まれたことでしょう。専門は高電圧工学で、日本の第一人者と目され、とくに高周波加熱に関する分野を切り開いて、やがてその技術はミシン・楽器などに広く用いられました。しかし、戦局が悪化し、空襲の危険が迫ってくると、工学部や理学部は疎開をよぎなくされました。篠原研究室も、岐阜県高山市や名古屋市内に疎開しています。

敗戦後、工学部の復興は困難をともしました。名古屋市東区西二葉町（現在の白壁二丁目、県立明和高等学校付近）の仮校舎が空襲で焼失したため、その代替施設が必要でしたし、戦争で頓挫していた東山キャンパスの工学部校舎の建設も進めなければなりません。篠原は、工学部長の指示をうけ、代替施設の確保に奔走しました。そして、一九五三年に工学部長となった篠原に残されていた大きな課題は、高蔵キャンパス（現在の名古屋市熱田区六野）の東山移転でしたが、これは建築交換方式（第三代勝沼学長の項を参照）によって、五六年に実現しました。その後、教養部長をへて、六三年七月に学長となります。

篠原学長時代の大きな実績は、やはり名古屋大学が「たこ足大学」から脱却したことでしょう。すでに理・工・経済・法・文学部が東山に集結していましたが、一九六三年に教育学部、六四年に大学本部・教養部、そして六六年には農学部が移転を果たしました。そのほか、日本ヘラルド映画株式会社会長の古川為三郎・志ま夫妻の寄付を得て、六四年に古川図書館（現在の名古屋大学博物館および年代測定総合研究センター）が落成したことも特筆されます。

しかし、任期も終わりに近づいた頃、名大も大学紛争の時代に突入します。六八年にいわゆる医学部紛争が起こり、大きな社会問題として全国から注目され、六九年には東山でも大学紛争の嵐が吹き荒れます。篠原学長はこれへの対応に苦慮し、健康も悪化したため、任期満了を目前にした五月に辞任しました。七三年に勲一等瑞宝章をうけています。

第六代学長

芦田 淳（あしだ きよし、任一九六九〜七五）



第六代学長の芦田淳（一九一四―二〇〇一）は、一九一四（大正三）年、現在の兵庫県芦屋市に生まれました。一九三八（昭和一三）年に東京帝国大学農学部農芸化学科を卒業、大学院で研究を続け、アジア・太平洋戦争ただなかの四四年に大阪帝国大学産業科学研究所講師、敗戦後まもなく助教授となりました。五三年、名古屋大学農学部農芸化学科教授に就任します。

名古屋大学農学部は、一九五一年に設置されたばかりで、しかも安城市にあり、当初は施設面もきわめて不十分でした。それでも芦田は、栄養化学講座の教授として、研究と教育に熱心に取り組みました。研究業績で特筆すべきは、世界に先駆けて栄養学に生化学的方法を導入したことです。六三年に日本栄養・食糧学会武田賞、六四年には日本農学賞と読売農学賞を受賞しています。著書『栄養化学概論』（一九五三年初版）は、不朽の名著として、現在でも栄養学

を学ぶ者に読み継がれています。また、六四年から六八年まで農学部長を務めました。

そして、一九六九年五月に学長事務取扱に任命されます。これは、前項でもふれたように、大学紛争で学内が騒然とするなか、篠原卯吉学長が任期をわずかに残して辞任したことによる措置でした。そして七月、正式に学長に就任します。この六九年は、東山キャンパスにも紛争が波及し、五月には本部と教養部が学生によって封鎖される事態となりました。芦田学長は、学生の退去を求めつつも、話し合いには応じる意向を示し、粘り強く紛争の解決に努力しました。また大学自治を守るため、国会での「大学運営に関する臨時措置法案」の強行採決に抗議する声明を発表しています。しかし紛争は沈静化せず、九月には学生が芦田学長を豊田講堂に「軟禁」し、事態の説明を強要しようとする事件が発生しました。この時、学長は不適切な方法を批判し、説明を拒否しますが、紛争はこの年の一二月まで続き、最後は学校側による学生の実力排除、その後の警察の立ち入り捜査という形で終結したのでした。

そして芦田学長は、動揺した大学を立て直すため、紛争の終結前から大学改革に関する提案を積極的に発表し、学長直属の非公式機関として改革試案検討委員会を発足させました。また、一九七二年には、「研究と教育に関する大学問題検討委員会」を設置し、同委員会は二度の答申を提出するなど、その後の大学改革へつながっていききました。

退官後、梶山女学園大学教授となり、一九八三年に同大学学長に就任、八六年には勲一等瑞宝章を受けています。

第七代学長

石塚 直隆（いしづか なおたか、任一九七五〜八一）



第七代学長の石塚直隆（一九二一—一九九三）は、一九二二（大正元）年、アメリカのサンフランシスコで生まれました。石塚の父は、義務教育を終えてすぐにアメリカに渡った移民でしたが、息子には最高の教育を受けさせたいと、生後半年の石塚を、神奈川県足柄下郡国府津村（現在の小田原市）の長兄に預け、養育を依頼しました。石塚は、東京府立第七中学校から官立東京高等学校へ進み、一九三四（昭和九）年に大阪帝国大学医学部へ入学しました。卒業後まもなく、日本と戦争をしていた中国（上海）の病院に赴任しますが、その翌年の四一年に日本とアメリカが開戦します。石塚にとって、実の両親が住んでおり、自身も国籍を持っていたアメリカと日本が戦争をはじめたことは、大変つらいことでした。そして四三年に上海で召集され、第一線の戦場に軍医として従軍しました。

敗戦後、大阪大学医学部産婦人科教室にもどり、助手から助教授となりました。研究分野は、黄体ホルモンの生体内代謝、絨毛上皮腫の化学療法についてでした。そして一九五九年に奈良県立医科大学教授となったのち、六一年に名古屋大学医学部教授に就任しました。以後、旺盛な研究活動を続け、六六年には日本産科婦人科学会会長に就任、七二年には中日文化賞を受賞しています。石塚は、さらに医学を究めることを望みましたが、時あたかも名大学にも大学紛争の波が押し寄せ、いわゆる医学部紛争となりました。とりわけ六七年に当時の社会問題にもなった教授選考問題が発生すると、石塚は心ならずもいわゆる五人委員会の一人に選ばれ、これに真摯に取り組んだ結果、研究時間がほとんどなくなつたと回想しています。そして七二年には医学部長となりました。これも不本意であつたようですが、石塚医学部長は学部信頼回復のため全力を尽くしました。そして七五年七月、学長に就任しました。

六年間にわたる石塚学長時代の事績を見ると、施設面においては、名古屋市東区東門前町二丁目（現在の東桜二丁目）にあつた医学部附属病院分院が、名古屋市東区大幸一丁目（現在の南一丁目）に移転したことが特筆されます。現在ここには、医学部保健学科と大幸医療センターが置かれています。また八一年の任期満了直前には、現在の中央図書館が完成しました。組織面では、七七年の名古屋大学医療技術短期大学の併設がありますが、石塚学長が最も時間とエネルギーを注いだのは、何と言つても教養部改革でした。

教養部改革は、すでに前任の芦田学長時代に先鞭がつけられ、とりわけ一九七〇年の大学設置基準の改正をうけて検討が進みました。七二年に教養部大学問題検討委員会が設置され、七四年には同委員会の答申などに基づいて、学長の直属機関として四年一貫教育検討委員会が設けられました。この委員会は、石塚学長が就任してのちも審議を続け、七七年に答申が提出されました。この答申は、のち八四年のいわゆる五九年度カリキュラムとして結実します。また、石塚学長が最も苦勞したのが、教養部改革を政府への概算要求としてまとめる作業で、一次案を作成するまでに就任してから丸三年をかけ、二次案に至るまでさらに二年を要しました。こうした学内における議論が、一九九三（平成五）の教養部廃止、二〇〇一年の教養教育院設置（学内措置）などをへた、現在の全学教育システムに礎になつていともいえます。

石塚学長は、一九八一年七月に任期満了で職を退きました。退任の辞では、大変恵まれた六年間であつたとしたうえで、新設した医療技術短期大学部は四年制をめざすべきであること、念願の歯学部設置が実現しなかつたことが残念でならない、とも述べています。その後、大阪府立母子保健総合医療センター総長を八四年まで務めました。八五年には勲一等瑞宝章を受章しています。

第八代学長

飯島 宗一（いじま そういち、任一九八一〜八七）



第八代学長の飯島宗一（一九二二—二〇〇四）は、一九二二（大正一一）年、現在の長野県岡谷市に生まれました。一九四二（昭和一七）年に松本高等学校を卒業し、名古屋帝国大学医学部に入學、四年間の大学生生活のうちの三年間を戦時体制のただなかにすごしました。病理学を専攻しましたが、四五年三月の空襲によって校舎が焼失し、敗戦後は知多郡大府町の国立愛知療養所の仮校舎で勉強しました。その後、名古屋大学医学部病理学教室で研究を続け、五年に講師、ドイツ留学をへて五八年に助教授となりますが、六一年には広島大学医学部教授に転じます。

広島大学に赴任した飯島は、広島の前爆被害者の実態を病理学者として目の当たりにして、いわゆる原爆症の問題が、いかに人類にとって重大であるかを実地に認識します。そして、日本で初めて原爆症の病理学的研究に本格的に取り組み、世界に名前を知られるよ

うになりました。このこともあって、広島は原爆症研究の盛んな地としても定着しました。また飯島は、核兵器の悲惨さを率先してうったえ、核廃絶運動や平和運動にも生涯をかけて関わるようになり、大きな成果を上げました。これをテーマとする著書も多数あります。広大では、六九年に四七歳の若さで学長に就任し、二期八年にわたって大学紛争や学内改革、キャンパスの統合移転などの問題に取り組みました。

そして、学長退任後まもなく名古屋大学にもどり、その二年後に医学部長、さらにその翌一九八一年に学長に就任しました。他大学での学長経験者の学長就任は、前身大学の学長を経験した第二代の田村春吉総長を別にすれば、名大創立七〇年の歴史の中で例がありません。また、創立以来初めての、母校を卒業した生え抜き学長の誕生となりました。

飯島新学長は、『名古屋大学学報』に「学長就任にあたって」と題する短い文章を寄せました。そこには、名古屋大学が戦時下における厳しいスタートだったにもかかわらず、「学問振興のエネルギーと、学の総合への情熱がみなぎって」おり、敗戦直後は、建物もお金も、食べ物すらない時代であったものの、キャンパスには希望があふれており、自分の学生時代の青春の記憶と重ね合わせて「自由で活達（なげ）な名古屋大学の建学の気風」を想起する、との感慨が述べられています。建学当初から二〇年も名大に身を置いていた飯島学長の言葉だけに重みがあります。

飯島学長時代の名大の動向として注目されるのは、外国人留学生の数が劇的に増えたことです。それまでは、緩やかに増加する程度だったのが、ようやく七九年から増加率が上がりはじめ、飯島学長在任の八一年から八六年にかけて、三倍近くの三二四人に増加しました。その間、国際交流会館（インターナショナルレジデンス）の開設や留学生向けのコースや専攻の設置、名古屋大学の教職員による名古屋大学留学生後援会の発足など、留学生の受け入れを促進するさまざまな取り組みがおこなわれました。現在、名古屋大学では、大学院を中心に世界七〇数カ国から一二〇〇人をこえる留学生が学んでいます。これは学生総数の七%強というきわめて高い数字であり、大学の大きな特徴の一つになっています。

また、「名古屋大学平和憲章」が、紆余曲折をへながらも何とか一九八七年の制定にこぎつけられた背景には、平和運動家としても高名を得ていた飯島学長の存在が大きく作用していたことはまちがいないところです。その飯島学長が就任の辞に記し、平和憲章にも使われている、名古屋大学の学風を示す「自由闊達くわただ」という言葉は、二〇〇九年に「名古屋大学学術憲章」にも盛り込まれました。

退任後は、一九九一（平成三）年から愛知県芸術文化センターの初代総長を務め、九六年には勲一等瑞宝章を受けています。二〇〇四年の逝去後、その蔵書など約五千点が、ご遺族から名古屋大学附属図書館に寄贈されました。

第九代学長

早川 幸男（はやかわ さちお、任一九八七〜九二〇

第九代学長の早川幸男（一九二三—一九九二）は、一九二三（大正一二）年、現在の愛媛県新居浜市に生まれました。四二（昭和一七）年に私立武蔵高等学校（東京）を卒業し、東京帝国大学理学部に入學しました。卒業後、中央気象台技官をへて、四九年には大阪市立大学理工学部講師、翌年助教授となりました。そして、京都大学基礎物理学研究所教授をへて、五九年には名古屋大学理学部物理学科教授に就任します。担当は、新設された原子核理論講座でした。

名大理学部の物理といえば、二〇〇八（平成二〇）年に二人の卒業生がノーベル物理学賞を受けたことで、あらためて社会の注目が集まっていることはご存じかと思えます。

早川の学術業績は多岐にわたり、素粒子、原子核、宇宙線、プラズマなどの広範な物理学の分野で多大な業績を上げるとともに、これらの研究を基礎にした新しい宇宙物理学の発展に大きな足跡を残しました。ま



た、宇宙からの観測の重要性を予見し、自ら実験グループを率いて、日本初の宇宙X線のロケット観測に成功しました。その後も、宇宙観測の分野を切り開き、いわゆる宇宙天文学の創始の中心となりました。八六年には紫綬褒章、九一年には日本学士院賞を受けています。

理学部長を務めたのち、一九八七（昭和六二）年七月に就任した早川学長は、先端技術共同研究センター（現在のエコトピア科学研究所先端技術共同研究施設）、太陽地球環境研究所、年代測定資料研究センター（現在の年代測定総合研究センター）の附置などに尽力しました。とりわけ九一年に大学院国際開発研究科を新設したことは特筆されます。また八九年には、設置以来三〇年の歴史を持つプラズマ研究所が発展的に解消し、文部省核融合科学研究所（現在は大学共同利用機関法人、岐阜県土岐市所在）となったことも大きな出来事でした。

早川学長は、就任時の文章で、創立二〇年目に赴任した時には若い大学として活力に満ちていた名古屋大学が、大学の膨張にともなう学部・学科間の壁が高くなり、質の低下が起これたと指摘し、この傾向をどう受けとめ、五〇年の歴史を次にどう生かすかが課題であると述べています。これは、この時期の大学に共通の大きな問題でした。

八九年、創立五〇周年記念式典が挙行され、記念事業の一つとして名古屋大学シンポジオンの建設がはじまりました。しかし早川学長は、その落成直前の九二年二月、病気のため他界しました。翌三月には、豊田講堂において大学葬がおこなわれています。

第一〇代総長

加藤 延夫（かとう のぶお、任一九九二〜九八）

第一〇代総長の加藤延夫（一九三〇—）は、一九三〇（昭和五）年、愛知県名古屋市に生まれました。四二年に愛知県立明倫中学校（現在の県立明和高等学校）に入学しますが、四五年に陸軍航空士官学校を受験し、その入学直前に敗戦をむかえました。その後、第八高等学校をへて、五四年に名古屋大学医学部を卒業しました。旧制最後の卒業生でした。大学院に残って研究を続け、五九年に医学研究科を修了、医学部助手となり、六三年には講師になりました。

愛知学院大学歯学部微生物講座助教授に就任したのち、六七年から六八年にかけて、フンボルト財団の奨学生として西ドイツのギーゼン大学で研究しました。同大学から正規のスタッフとなるよう依頼され、その手続きをしていると、母校から細菌学担当の要請があり、迷ったすえに帰国します。しかし帰国してみると、名大医学部は紛争のただなかにあり、正式に医学部細



菌学講座の助教授に任命されるまで二年を要するという状態でした。七三年に教授に就任しています。九三年に日本細菌学会総会会長、九五年に日本医学会総会副会頭を務めました。

医学部の紛争からの正常化のため積極的に発言・行動していた加藤は、一九七六年には名大史上最年少の四六歳で医学部長に選任されました。加藤は、岳父にあたる加藤鏝五郎（戦前・戦後に衆議院議員を三〇年務めた政治家、本書第一部の田村春吉の項を参照）から、政治や事業には手を出さず、研究者として生きるようにと言われ、本人もそのように考えていました。しかし、誰かがやらなければならない仕事であると考え、大学の運営にも深く関わる人生を選んだといえます。医学部長を三期通算六年（七六〜七八年、八一〜八五年）務め、鶴舞・大幸地区の機構と施設の充実を実現しました。『名古屋大学五十年史』の編さんにも熱心に取り組み、九〇年から九二年にかけて名古屋大学史編集委員会委員長を務めています。

そして一九九二（平成四）年四月、早川幸男学長の逝去により業務を代行していた松尾稔学長事務取扱の後をうけ、総長に就任しました。なおこの時から、名大では再び「総長」が公式な名称として復活することになりました。

総長としての六年間の事績としては、一九九一年の大学設置基準改訂を背景とする、大規模な組織改革を第一に挙げなければなりません。とりわけ九三年の教養部廃止（情報化学部部の設置）に象徴される四年一貫教育体制への完全な移行と、理学部（九六年）と工学部（九七

年)のいわゆる大学院重点化の完了がその最たるものといえるでしょう。その他の学部でも大幅な改組がおこなわれ、次の松尾総長の時代に入ってまもなく全学的な大学院重点化が完了します。さらに、独立大学院として人間情報学研究科(一九九二)年と多元数理科学研究科(九五)年)が、また医療技術短期大学の四年制への発展として医学部保健学科(九七年)が創設されました。そのほかにも、多くのセンターや施設の附置や統廃合がおこなわれました。

施設面では、深刻になっていた狭隘化・老朽化を解決するべく、一九九三年を「名古屋大学施設再開発元年」にすると大学内外に宣言し、その後実際に各キャンパスの施設整備がめざましく進みました。ごく一部にすぎませんが、工学研究科一号館、国際開発研究科棟、ベンチャービジネスラボラトリー、医学部附属病院の新病棟、人間情報学研究科(現在は情報科学研究科)棟、理一号館(多元数理科学研究科棟)、などを挙げることができます。

また、大学をめぐる新しい動きを適確に伝達し、名大構成員の意思疎通をはかることを目的として、一九九三年に『名大トピックス』が創刊されました。事務的な色彩の強かった『名古屋大学学報』とは異なり、名大の主な出来事や話題を、写真などを多く掲載しながら提供する広報誌です。紙面のリニューアルをへて、オールカラーの月刊誌として現在に至っています。

任期満了による総長退任後は、愛知芸術文化センター総長、愛知医科大学学長・理事長を歴任しました。二〇〇九年三月現在、愛知医科大学理事長として在任しています。

第一二代総長

松尾 稔（まつお みのる、任一九九八～二〇〇四）

第一二代総長の松尾稔（一九三六―）は、一九三六（昭和一一）年、京都府で生まれました。京都大学工学部土木学科を卒業、六二年に同大学院工学研究科を修了と同時に同大学助手となり、講師、助教授をへて、七二年に名古屋大学工学部助教授に就任しました。七八年には教授となり、工学部長、理工科学総合研究センター（二〇〇四年にエコトピア科学研究機構へ統合）長などを歴任したのち、一九九八（平成一〇）年四月、総長に就任しました。日本工学会アカデミー理事、土木学会会長など歴任し、二〇〇三年には土木学会功績賞をうけています。

松尾総長は就任にあたって、現在が学術のあり方の歴史的なパラダイム転換期であるとし、「先端性と調和」を同時に追求するためにも、本当の意味での総合大学として、文系・理系の連携・協力が必要であると述べ、政府の行財政改革によって大学改革・定員削



減・法人化が求められるなか、大学運営に乗り出しました。

組織面では、加藤総長時代にはじまった大学院重点化が文系にもおよび、二〇〇〇年度には全ての研究科で完了することになりました。また〇三年度には、大学院環境学研究科が新設されました。任期の後半には、全国の大学に先駆けた、部局を超えた研究専念組織である高等研究院など、多くの研究センターや学内附属施設の新設がおこなわれました。施設面では、IB電子情報館、医学部校舎一号館、文系総合館、学生寮国際喫煙館、環境総合館、高等総合研究館などが竣工しています。また、老朽化した各校舎の耐震および全面改修工事も進み、次の平野総長の時代においてほぼ完了することになりました。

そして二〇〇〇年には、二年間の全学的な検討をうけて、大学の基本理念と長期的な目標を掲げた「名古屋大学学術憲章」を、全国に先駆けて制定しました。同時に、数年を見すえた中期目標ともいえるものとして、「名古屋大学アカデミックプラン」を策定しました。また、〇二年には全学同窓会が設立され、豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が初代会長に就任しました。また、名古屋大学の名前を世界にとどろかせた、二〇〇一年の野依良治教授（当時、物質科学国際研究センター長）のノーベル賞受賞も、松尾総長時代のことです。

こうして、国立大学法人化への準備を終え、二〇〇四年三月に任期満了により退任した松尾総長は、二〇〇九年三月現在、財団法人名古屋都市センター理事長を務めています。

第二二代総長（国立大学法人名古屋大学）

平野 眞一（ひらの しんいち、任二〇〇四〜〇九）

第一二代総長の平野眞一（一九四二―）は、一九四二（昭和一七）年、現在の愛知県知多郡美浜町に生まれました。六五年に名古屋大学工学部応用化学科を卒業、七〇年に大学院工学研究科博士課程を修了すると同時に東京工業大学工業材料研究所の助手となり、アメリカのペンシルバニア州立大学博士研究員をへて、七六年に助教授に就任します。そして七八年には、名古屋大学工学部助教授となりました。八三年に教授、その後は高温エネルギー変換研究セン



ター長、先端技術共同研究センター長、工学研究科長を歴任しました。専門はセラミックスで、この分野における各種受賞をへたのち、二〇〇六（平成一八）年にはアメリカセラミック学会の最高榮譽賞を最年少で受賞しました。国際セラミック連盟や日本セラミックス協会などの会長も歴任しており、セラミックス研究の世界的権威といえます。

そして二〇〇四年四月、名大が国立大学法人として再出発すると同時に、平野総長が誕生しました。法人化後は、総長と七名の理事からなる役員会が大きな経営責任を追うことになり、総長の果たす役割もこれまで以上に大きくなりました。ただ平野総長は、大学運営の基本を「組織主義」に置き、大学構成員からの多様な声を聴いて、その総合力としての活性化が最大限にはかられるように調整し導くことが、総長に求められるリーダーシップであると述べています。

平野総長は、国からの運営費交付金の削減など、大学運営がますます厳しくなっているなかで、名古屋大学学術憲章がうたう「優れた研究の創造と将来を担う豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を通して社会に貢献する」という本学の使命は不変であるとの信念の下、様々な事業に取り組みました。主なものを見ていきたいと思います。

研究組織の面では、二〇〇四年度に既存のセンターや施設を再編・統合して発足したエコトピア科学研究機構を、〇六年度から大学附置研究所としてのエコトピア科学研究所に発展させたことが挙げられます。「豊かで美しい持続可能な社会（エコトピア）の実現」というその理念は、現代社会における普遍性を持つものであると同時に、名古屋大学学術憲章が「人間性と科学の調和的発展」として掲げるものでもあります。また、国際的な観点から教育・研究活動に関するアドバイスを受ける組織として、七名の世界的な研究者からなるインターナショナルアドバイザリーボードを設置しました。そして名古屋大学は、薬学部や薬学系研究科を持たな

い唯一の旧帝国大学ですが、この年来の課題を解決するため、地域の私立大学薬学部などとの共同による「共同大学院創薬科学研究科」構想を立ち上げ、創設に向けての準備を進めました。

運営組織では、諸問題や諸施策を統括・立案・実行していくため、国際交流協力推進本部、情報連携統括本部、環境安全衛生推進本部、総合企画室、広報室などの運営支援組織を整備しました。施設面では、二〇〇四年に名大史上八人目の文化功労者に選ばれた赤崎勇特別教授の業績を記念する赤崎記念館の新築のほか、〇八年二月には、トヨタ自動車株式会社およびトヨタグループ各社の寄付により、豊田講堂の改修・増築が竣工しました。

また、法人化後の国立大学では、地域の企業・団体・個人や同窓生との連携を深め、支援を得ていくことの重要性が、より高まったといえます。その一環として、二〇〇五年一〇月に初めて開催したホームカミングデイは、同窓生のみならず、地域住民や学生の家族などにも広く門戸を開いており、昨年までに四回を数えて、本学の重要な行事として定着しつつあります。

また、創立七〇周年記念事業の一つとして、〇六年に名古屋大学基金を創設しました。

そして、平野総長時代のビッグニュースは、何といっても二〇〇八年、益川敏英博士と小林誠博士にノーベル物理学賞、下村脩博士に同化学賞が授与されたことです。受賞の対象となった研究は、いずれも名古屋大学時代にその基礎がなったものであり、名古屋大学が日本のみならず世界中から注目されたことは記憶に新しいところです。

第一三代総長（候補者）

浜口道成（はまぐち みちなり、任二〇〇九）

そして二〇〇八（平成二〇）年一月、第一三代総長候補者として浜口道成教授（大学院医学系研究科長）が選出され、二〇〇九年四月一日に就任します。

浜口道成第一三代総長候補者は、一九五一（昭和二六）年、三重県に生まれました。七五年に名古屋大学医学部を卒業後、大学院に進学し、八〇年には医学博士の学位を取得しました。

同年、名古屋大学医学部附属癌研究施設の助手、四年後には病態制御研究施設の助教授となりました。その後、ロックフェラー大学分子腫瘍学講座の研究者として、アメリカでの三年間の研究生生活をへて、九三年には教授に就任しました。病態制御研究施設長、大学院医学系研究科副研究科長を歴任したのち、二〇〇五年から同研究科長に就任、現在に至っています。平野総長に続く名大生え抜きであり、初の戦後生まれの総長でもあります。研究者としては、常に癌研究の



最先端に身を置き、とくに癌の遺伝子治療の研究において大きな業績を上げてきました。学会では、日本生化学会、日本ウイルス学会、日本癌学会でいずれも評議員を務めています。

浜口総長候補者は、昨年一〇月の選出決定後の記者会見や、『名大トピックス』二〇〇九年一月号に掲載された平野総長との年頭対談などにおいて、新総長としての抱負を述べています。それらによると、浜口総長候補者は、「人材の育成」を大学運営の軸にすえようとしていることが分かります。その人材とは、日本の未来を切り開く人材であり、中部地区の中核となる人材です。年頭対談では、次のようにも語っています。

「名古屋大学というのは、よく新入生の出身地が中部地区に偏つていると言われますが、私はそれで良いと思います。入る時はドメスティックに、出る時はインターナショナルにというのが、大学が果たすべき役割だと思います。アメリカのグローバルイノベーションというものが見えている今、やはり土着文化とも言うべきものをつかりと心の中に持って、インターナショナルに活動できる人材を育てなければなりません。」

地域性と国際性の融合、でしょうか。そうした人材育成のためには、国際的通用性、精神的・社会的な自立、複眼的な視点という3点が必要であり、海外での研修などで学生に自己変革をとげる機会を積極的に提供するとともに、日本の文化を理解すること、異なる分野間の連携研究を進めることが重要であると説いています。四月からの大学運営が注目されるところです。

おわりに

以上、ごく簡単にはありますが、名古屋大学の歴代総長・学長、および前身諸学校の主な校長のあらましについてご理解いただけたかと思います。

今回は、より多くの人物を紹介することに重きをおいたため、一人に割ける紙数がぎわめて限られています。略伝であるとしても、あるいは不満を感じられる方もおられるかもしれませんが、後日の課題とさせていただきます。

これまで、名古屋大学や前身諸学校の歴史を研究・紹介するにあたって、その総長や校長の人物像や個性などについては、それほど重視されてきたとはいえないと思います。指導者のみの視点によって描かれた歴史が、一面的なものになることはもちろんですが、組織や集団しか登場しない歴史もまた無味乾燥といわざるをえません。しかも、国立大学が法人化されたことにより、その是非はともかく、総長の果たす役割がこれまでより大きくなることはまちがいないところではあります。大学史を記述するに、総長に注目する必要性はより高まったといえるでしょう。

本書が、不十分な形であれ、その試みの一つとなることができたら、この上ないことと思います。

主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』全四冊（名古屋大学、一九八九、九五）
- 名古屋大学史編集委員会編『写真集 名古屋大学の歴史』（名古屋大学、一九九二）
- 『名大史ブックレット』一〜一二（本書巻末の一覧表参照）
- 『名大トビックス』（一九九三）／『名古屋大学学報』（一九六一〜二〇〇六）
- 鶴見祐輔『後藤新平』第一卷（勤草書房、一九六五）
- 『六郷の歴史』一四（六郷町町史編纂委員会、一九八四）
- 春光同門会編『田村春吉』（名古屋大学医学部皮泌科春光同門会、一九五四）
- 大島先生記念会『大島義脩先生伝』（大島先生記念会、一九三九）
- 関口隆克編『水野敏雄先生追悼録』（水野秀夫、一九八三）
- 名古屋大学大学文書資料室編刊『名古屋大学大学文書資料室保存資料目録』七（二〇〇七年）
- 勝沼精蔵『桂堂夜話』（黎明書房、一九五五）／三輪和雄『乱世 三代の夢』（講談社、一九九二）
- 『PUTABA』第一二号（篠原教授御退官記念号）（名古屋大学二葉会、一九六九）
- 石塚直隆『もう一つの軌跡』（名古屋大学出版会、一九八五）
- 飯島宗一先生追悼集刊行会編刊『飯島宗一先生追悼集』（二〇〇五）
- 名古屋大学「故早川幸男名古屋大学学長大学葬」（一九九二）
- 加藤延夫『続 世紀のはざまに』上巻（二〇〇六）

著者略歴

堀田 慎一郎（ほった しんいちろう）

一九六九年 愛知県豊橋市生まれ

二〇〇〇年 名古屋大学大学院文学研究
科博士後期課程修了（歴史学）

現在 名古屋大学文学書資料室助教

専攻 日本近代史、記録史料学

名大史ブックレット13

名古屋大学 歴代総長略伝

——名大をひきいた人びと——

二〇〇九年三月三十一日 第一刷発行

著 者 堀田 慎一郎

編集発行 名古屋大学文学書資料室

〒464-8601 名古屋市中種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市中熱田区桜田町一九二〇

電話 〇五二（八七一）九一九〇

名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

-
- | | | | |
|---|-------------------|-------|-----------|
| ① | これまでの大学院・これからの大学院 | 山口 拓史 | 2000年12月刊 |
|---|-------------------|-------|-----------|
-
- | | | | |
|---|-----------------------|------|----------|
| ② | 名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編) | 神谷 智 | 2001年2月刊 |
|---|-----------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|---------------|-------|----------|
| ③ | 名古屋大学 スポーツの歩み | 高橋 義雄 | 2001年3月刊 |
|---|---------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|------------------------|-----------|-----------|
| ④ | 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物— | 堀田典裕・木方十根 | 2001年12月刊 |
|---|------------------------|-----------|-----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------------|-------|----------|
| ⑤ | 名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生— | 加藤 鉦治 | 2002年3月刊 |
|---|--------------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------|------|----------|
| ⑥ | 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治 | 神谷 智 | 2003年3月刊 |
|---|--------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------|-------|----------|
| ⑦ | 名大祭—四〇年のあゆみ— | 山口 拓史 | 2003年3月刊 |
|---|--------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|-------------------------|-------|----------|
| ⑧ | 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③— | 山口 拓史 | 2004年3月刊 |
|---|-------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------------|-------|----------|
| ⑨ | 豊田講堂— <i>Toyoda Auditorium</i> — | 山口 拓史 | 2004年9月刊 |
|---|----------------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------|-------|----------|
| ⑩ | 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②— | 堀田慎一郎 | 2005年3月刊 |
|---|--------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------|-------|----------|
| ⑪ | 農学部の誕生と安城キャンパス—学部の誕生と草創期①— | 堀田慎一郎 | 2006年3月刊 |
|---|----------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|-----------------------|-------|----------|
| ⑫ | 第八高等学校—新制名古屋大学の包括学校①— | 山口 拓史 | 2007年3月刊 |
|---|-----------------------|-------|----------|
-



表紙写真：名古屋大学本部1号館 第2会議室。
歴代総長・学長の肖像写真が掲げられて
いる。